

シンシア

あなたと女子医大を結ぶコミュニケーションマガジン

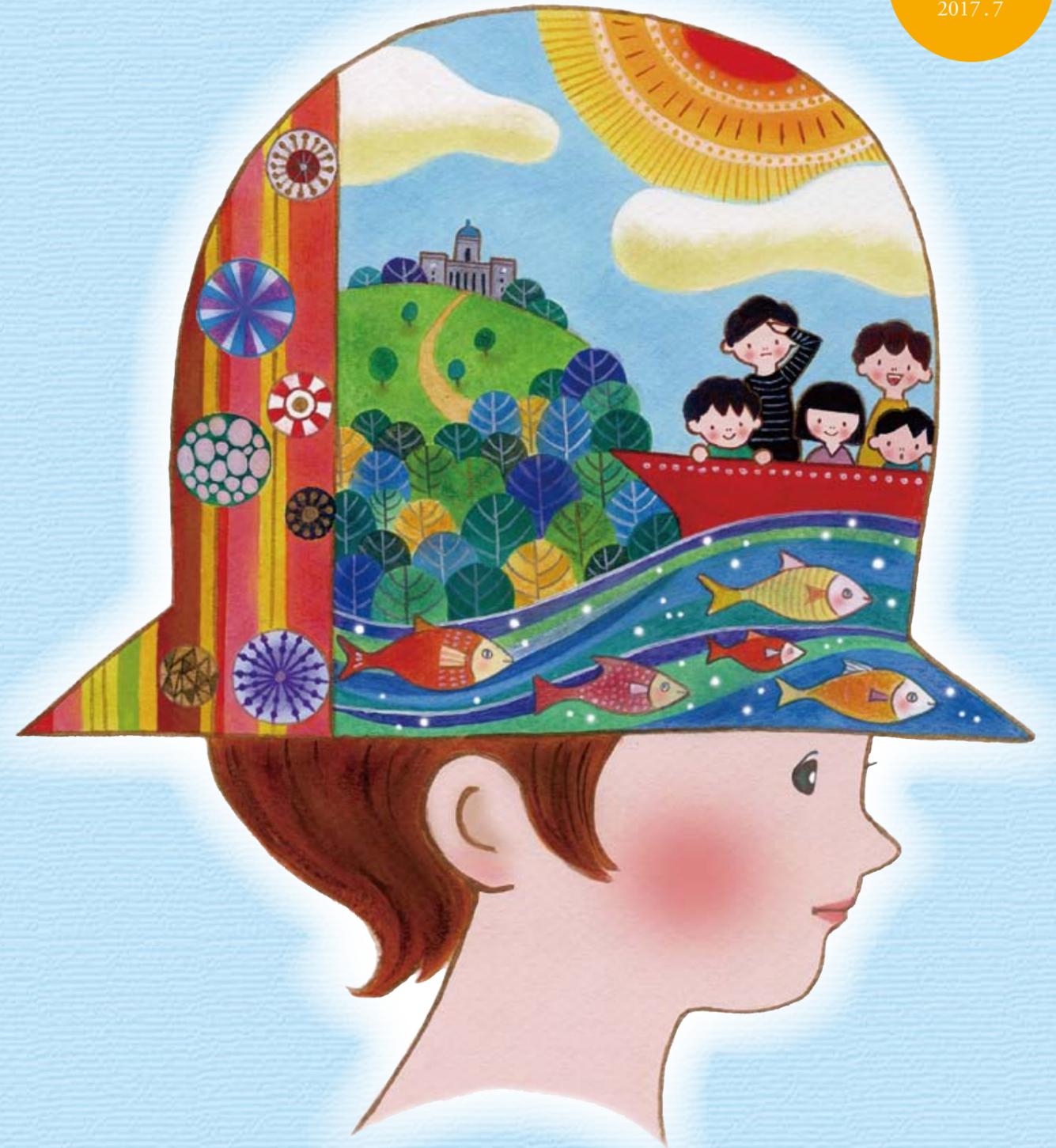
Sincere

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY

No.8
2017.7



東京女子医科大学病院検体検査室の血液検査装置。



Sincere
シンシア
No.8

発行 学校法人 東京女子医科大学
〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 TEL.03-3353-8111 (代)
<http://www.twmu.ac.jp/>

発行日 2017年7月
制作 株式会社 教育広報社

■「Sincere」に関するお問い合わせやご意見・ご要望は、下記までお気軽にどうぞ。
〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 東京女子医科大学 広報室 Mail address: kouhou.bm@twmu.ac.jp

萩原 タケ

(はぎわら たけ 1873~1936年)

看護婦育成に半生を捧げた 日本のナイチンゲール

◆幼少の頃から向学心が旺盛

看護活動に顕著な功労のある人を顕彰するために赤十字国際委員会が制定した「フローレンス・ナイチンゲール記章」。その第1回目の授与は、ナイチンゲール生誕100周年を記念して1920(大正9)年に行われた。この栄えある記章の受章者(52人)の中には3人の日本人が名を連ねた。その1人が萩原タケである。

タケは1873(明治6)年、神奈川県西多摩郡五日市村(現・東京都あきる野市五日市)で薬屋を営む家に生まれた。母親のすすめで5歳のときに勸能学校という小学校に入学。成績優秀でめきめき頭角を現したものの、家計が貧しかったため通ったのは3年間ほどだった。それでもタケの向学心は衰えず、弟たちの子守りや家事を手伝いながら本をむさぼり読み、寺の夜学にも顔を出した。

さらに、『女学雑誌』という女性誌の通信教育を受け始め、和歌や漢学、算術、歴史、理化学などを学び、1891(明治24)年に全科を修了して卒業証書を得た。その年にタケは産婆学校に入学すべく上京。だが、すぐさま学費や生活費に窮し、わずか1年足らずで帰郷を余儀なくされた。

◆27歳で病院船の看護婦長に抜擢

転機が訪れたのは20歳のときだった。日本赤十字社が看護婦生徒を募集しており、しかも学費が支給されるということを知ったタケは迷わず応募。みごと合格し、1893(明治26)年に看護婦養成所に入学したのである。

手先が器用で動作が機敏なうえ、気配り上手でもあったタケは、たちまち看護



あきる野市役所五日市出張所敷地内に建つ萩原タケの胸像。

婦としての素質を開花させる。1894(明治27)年に日清戦争が勃発すると、看護婦養成所の生徒たちも傷病兵の看護に従事することになったが、だれにでも優しく丁寧に接するタケの献身的な看護は、患者や医師から高く評価された。

1896(明治29)年に看護婦養成所を卒業したタケは、日本赤十字社病院(現・日本赤十字社医療センター)で看護婦として本格的なスタートを切った。1900(明治33)年に中国で起きた北清事変(義和団事件)の際には、派遣された病院船「弘済丸」の看護婦長に抜擢され、フランス兵をはじめとする連合軍の傷病兵も看護。その功績により、フランス政府から「オフィシェ・ド・アカデミー記章」が贈られた。

1903(明治36)年、30歳となったタケは日赤病院看護婦副取締となり、看護婦を統括するとともに生徒の教育にも携わるようになった。そして1907(明治40)年、再び大きな転機が訪れる。伏見宮家から山内豊景侯爵に嫁いだ禎子夫人の洋行に随行することになったのである。

◆ポーランド人孤児救済を陣頭指揮

侯爵夫人の随員としてヨーロッパを訪れたタケは、任務終了後もパリに残って語学の勉強に励んだ。その間に梨本宮殿下夫妻のヨーロッパ各国訪問にも随行し、それらの国々の病院を訪れて看護の実態を視察するチャンスを得た。また、国際看護婦(師)協会のロンドン会議にも出席し、世界各国から集まった女性たちが積極的に意見を交わし合う熱気に深い感動を覚えた。

約2年間のヨーロッパ滞在を経て帰国したタケは、各国の看護事情に精通した女性として注目を集め、1910(明治43)年には日赤病院看護婦監督に就任した。37歳にして日赤病院看護部門のトップに上り詰めたのである。

フローレンス・ナイチンゲール記章を受章した1920年は、タケにとって別の意味で感慨深い年となった。ロシア革命後の混乱の中、シベリアに流刑されたポーランド人は飢えと寒さで凄惨な目に遭っていた。せめて孤児だけでも救おうと、ウラジオストク在住のポーランド人が欧米各国に救済を依頼したが失敗。最後の頼みの綱となったのが日本であり、日本赤十字社が孤児を救済することになった。

タケの指揮の下、1920年に375人、翌々年に390人の孤児を受け入れ、温かな看護を提供。タケ自身も合間を縫って子どもたちを励ました。元気を取り戻した彼らは無事、ポーランドに帰国した。

晩年に持病の喘息を悪化させたタケだが、1936(昭和11)年に日赤病院で息を引き取るまで26年間、看護婦監督を務め、数多くの看護婦を育成した。その数は実に2,700人余りものぼる。

C O N T E N T S

04 至誠人

宮田 麻理子 (東京女子医科大学医学部第一生理学講座教授・医学博士)
脳の仕組みを解明する研究は私の人生そのものです

06 医療最前線

**圧倒的なスケールと先進のシステムで
診療を支える中央検査部**



顕微鏡検査を行う臨床検査技師。

10 女子医出身者が活躍する街

**静岡市葵区
徳川家康ゆかりの城下町**

- スキンケアクリニック：静岡での美容レーザー治療のパイオニア
- 葵区の見どころ：静岡市役所本館／駿府城公園／静岡浅間神社／おでん街
- グルメスポット：三河屋／キル フェ ボン静岡／河童土器屋



駿府城公園内にある徳川家康像。

14 こんなところが女子医大

**食のセルフケア
栄養バランスのとれた食事づくりにチャレンジ**



調理実習を行う看護学部の学生。

18 健康維持・予防セミナー

**光老化
太陽光線による肌の老化をシャットアウト!**

20 がんばれ!女性医療人

**スムーズな復職をサポートする
女子医大ならではの研修プログラム**



復職に向けて研修を受ける女性医師。

23 吉岡彌生物語 その8

増築したばかりの東京至誠病院を焼失

【表紙】

夏の帽子

イラストレーター
中井 絵津子



大きくてまぶしい太陽の下
夢中で走り回った森の中の昆虫採集は
日陰をくれた樹々の香りを。

友だちと一緒に乗り込んだ船の旅は
たくさんの美しい魚たちが跳ね上げた
しょっぱい海の水と潮風と。

ケンカした後の夕暮れの仲直りは
どちらから話しかけたのか覚えていないけど
あの子の笑顔はたぶん一生忘れない。

たくさんのキラキラした夏の思い出を
この帽子は全部憶えている。
大人になってかぶれなくなっても。

※東京女子医科大学病院総合外来センター1階小児科待合室の壁画は中井さんが描いたものです。

脳の仕組みを解明する研究は私の人生そのものです

高校時代から脳の仕組みや働きに興味を抱き、これまでいくつかの世界的な発見をしてきた宮田麻理子さん。2015(平成27)年には女性研究者の地位向上に貢献した人に贈られる「入澤彩記念女性生理学者奨励賞」を受賞。研究活動とともに後進の育成にも力を入れている。

宮田 麻理子

(東京女子医科大学医学部第一生理学講座教授・医学博士)



■女子医大ならのびのびと学べる

私はもともと、人間を含めて生物に興味がありました。大学の学部選びを考え始めた頃は、「バイオ」が時代のキーワードだったこともあり、理学部や薬学部も選択肢に入っていました。医師である父から「人間に興味があるなら医学部をめざしたらどうか」とアドバイスされ、進路を医学部に絞りました。

通っていた学校はミッション系の女子校で、ほとんどの生徒がそのまま系列学院大学へ進みます。でも、その大学には医学部がなく、同級生で医学部志望者は私だけ。受験の必須科目である数Ⅲの授業がなかったため、自学自習しなければなりません。

女子医大では、医療の第一線で活躍されている女性の先生がたくさんいて、しかも当たり前のように女性が一つのチームを束ねて生き生きと指導されているのを目の当たりにしました。そうした姿が女性医師だった祖母と重なり、「ここならのびのびと学ぶことができ、自分のやりたいことを見つけられる」と思いました。部活はMESS(医学英語研究会)のほか合気道部にも所属し、週2~3回は道場通いをしていました。

■学生時代から脳の仕組みを研究

高校時代に動物行動学者であるコンラート・ローレンツの『ソロモンの指環』という本に出会って以来、行動を司る脳の仕組みに興味を抱いていた私は、大学に入るとますますその研究心が強くなってきました。そこで、夏休みや春休みに帰省するたびに愛知県犬山市にある京都大学霊長類研究所を訪れ、サル

に電極を付けていろいろな行動をさせる実験に参加させていただきました。このときの経験が、研究者としての道を歩む大きなきっかけとなり、卒業後は大学院に進みました。

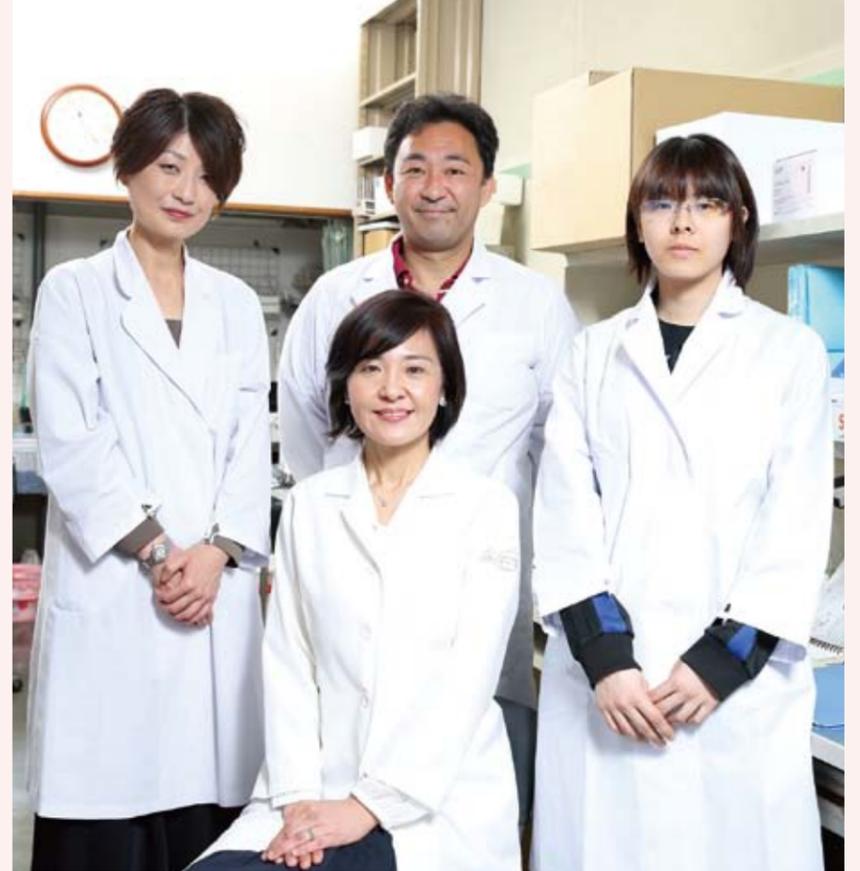
大学院時代の最後の1年間、小脳研究の世界的権威である理化学研究所脳科学総合研究センターの伊藤正男先生の門を叩き、国内留学。大学院博士課程修了後も、基礎科学特別研究員としてそのまま理化学研究所に残りました。そして、ストレスによって脳内に分泌されるCRFというホルモンが小脳の運動学習に必須であることを発見。これは、小脳の学習機能にホルモンが関与することを世界で初めて明らかにしたもので、研究成果は1999(平成11)年4月発行の『Neuron』誌に掲載されました。

その後、女子医大医学部助手、岡崎国立共同研究機構(現・自然科学研究機構)生理学研究所准教授を経て、2008(平成20)年に女子医大医学部教授に就任しました。

■女子医大での2つの大きな発見

女子医大で新たに取り組んだ研究テーマが、交通事故などで手足を失った方々が悩まされる「幻肢痛」の解明でした。幻肢痛は、失った手足があたかも存在するかのように痛みを感じるという症状です。脳には身体の部位に応じて感覚を知覚する「脳地図」があり、神経回路によって構成されています。幻肢痛は末梢神経切断後の脳地図の変化が原因とされていますが、その詳しいメカニズムは分かっていませんでした。

私は2012(平成24)年、末梢神経を損傷すると脳の中の神経回路が予想よりはるかに早い時期に“つなぎ換え”られることを明らかにしました。これは、従



研究室にてスタッフとともに。

来の学説を覆す世界初の発見でした。これにより、幻肢痛の原因解明とともに感覚障害に対する効果的なりハビリや治療法の開発につながると期待されています。

昨年も大きな発見がありました。成熟した大人の神経回路を安定して維持するためには、「代謝型グルタミン酸受容体1型」という分子が必須であることが分かったのです。神経回路は子供の頃に発達し、大人になると変化しないと考えられてきましたが、成熟した神経回路を維持する仕組みが解明されたわけです。自閉症などの発達障害では神経回路が安定的に維持されることが報告されていますが、この研究成果により、脳機能障害の病態解明や治療法の開発につながる事が期待さ

れます。

■神経回路の維持機能をさらに研究

研究者はエンドレスで成長し続けなければなりません。女性研究者は出産・子育てというライフイベントに時間を割かざるをえません。その中で目標を設定し、研究を重ねて論文を仕上げていくには、ある程度戦略的に取り組まなければなりません。

私も生理学研究所時代に夫と離れて暮らし、その間に出産して母子だけの生活を送りました。6人のファミリーサポートのお力を借りながら、朝は7時半に研究所へ顔を出して実験を行い、夕方5時半まで研究に没頭。行き帰りの電車の中では必ず論文を1本読むことを自分に課していました。でも、それがつらいと思ったり疎外されていると感じたりすることはなく、充実した毎日でした。研究することこそが私の人生そのものだ。

これからも、神経回路を解析するというテクニックを駆使しながら、脳の神経細胞や回路がどう変わっていくのかを明らかにしていきたいですね。とりわけ、神経回路の維持機能についての研究をさらに進めていくことを、当面の大きなテーマとしています。

宮田 麻理子(みやた まりこ)

愛知県出身。東京女子医科大学卒業後、同大学院博士課程に進み学位取得。1995年フランス国立科学研究センター(CNRS)留学。1996年理化学研究所基礎科学特別研究員、1998年東京女子医科大学医学部助手。2002年岡崎国立共同研究機構生理学研究所准教授を経て、2008年東京女子医科大学医学部教授。2014年東京女子医科大学医学部第一生理学講座教授に就任。2002年日本神経科学学会奨励賞、2012年吉岡博人医学研究奨励賞、2015年入澤彩記念女性生理学者奨励賞などを受賞。



圧倒的なスケールと先進のシステムで 診療を支える中央検査部

医師の診療にとって患者さんの臨床検査データは不可欠である。

東京女子医科大学病院では、その臨床検査を中央検査部が一手に引き受けている。

診療を陰で支えている中央検査部の舞台裏をのぞいてみよう。



午前中はほぼフル稼働が続く採血ブース。



採血管に血液を採取。



1日1,300人にもものぼる採血患者数

女子医大病院総合外来センター地下1階の採血コーナーには、午前7時半の受付開始と同時に患者さんがひっきりなしに訪れてくる。広い待合いロビーに設置された約130席のソファは、採血開始の8時までにはほぼ満席となり、立っている人も少なくない。

採血が開始されると、15の採血ブースにそれぞれ受付番号が表示され、該当

する患者さんがブースに向かう。採血に要する時間は1人当たり約3分。各ブースとも次から次へと患者さんが入れ替わり、午前中はほぼフル稼働の状態が続く。取材当日、待合いのソファに余裕が出てきたのは9時半を過ぎてからだ。午後に入っても、採血を受ける患者さんは絶えることがない。

こうして、1日の外来採血患者数は約1,300人を数え、年間の採血件数は優に

30万件にのぼる。これは、大学病院の中ではトップの数字である。

診療を支援する「緑の下の力持ち」

中央検査部は、採取された血液や尿などを検査する「検体検査」部門と、心電図や超音波、内視鏡検査などを行う「生理検査」部門で構成されている。所属している臨床検査技師数は、補助要員や事務職などを含めてざっと200人。これだけのスタッフを抱えている大学病

院は珍しい。しかも、専門分野の認定資格を有した技師が多く、大学病院屈指の幅広い検査を行っているのが大きな特徴だ。

中央検査部の役割と位置づけについて三浦ひとみ技師長は次のように説明する。「医師が患者さんの病気を診断したり治療したりする際、さまざまな臨床検査データが参考とされます。臨床検査なくして正確な診療はできないといっても過

言ではありません。中央検査部は、そうした臨床検査を担う専門の部署であり、院内全診療科からあらゆる検査オーダーが入ります。それらに対し、医師が常に最新のデータに基づいて診療できるよう、スピーディかつ精度の高い検査情報の提供に努めています」

さらに言葉を続けて、「特に検体検査部門では、検体を採取してから1時間以内に検査結果を電子カルテに送るという

体制を確立し、医師の診療を支援しています。もちろん、それは患者さんへのサービス向上にもつながっていると思います」と強調する。

先進の検査システムと進捗管理

採血コーナーの背後には、一大スペースを誇る「検体検査室」が設置されている。この最大の目玉は、採血管の自動搬送ラインだ。採血ブースで採血管に採取された血液(検体)は、そのままこ



中央検査部の三浦ひとみ技師長。

一大スペースを誇る検体検査室。

の検体検査室に送られてくる。そしてまず、採血管のバーコードを読み取って血液検査ラインと凝固系検査ラインに振り分けられる。

血液検査ラインでは、採血管が検査目的別に搬送ラインを進み、自動的に検査される。異常が検知されると顕微鏡検査のためのスライドガラスが自動的につくられ、技師が精密に検査するシステムとなっている。遠心機を通して行う凝固系検査ラインは、キャパシティが大きいうえシミュレーションしながら効率よく検査できるという特長を備えている。

こうした先進の血液検査システムが、“1時間以内に検査結果を出す”ことを可能としているのである。さらに、検査の進捗状況を大型モニターに表示して“見える化”を図っていることも特筆される。徹底した進捗管理も、検体検査室ならではの優れた点である。

国際レベルの高度な検査データ

免疫・生化学検査ラインも検体検査室の目玉の一つである。自動分析装置や検体搬送システムで構成されたラインでは、血液中の成分や各臓器の機能を効率的に測定・検査できるのが特長だ。

検体検査室の一角には、“ラボラトリー・インフォメーション”と呼ばれるコーナーが設置されている。ここは各診療科からの問い合わせ窓口であり、2人の技師が常駐している。「問い合わせは1か月に2,000件くらいあります。内容的には検査の追加依頼が多いですね」と三浦技師長。そうした依頼にもすばやく対応できるように、検査後に残った血液や尿などの検体は一定期間、保管しているとのことだ。

検体検査室は、臨床検査室に特化した国際規格「ISO15189」を取得していることも特徴の一つである。これにより、提供している検査データは国際的な臨床治験でも利用できることを意味している。また、遺伝子関連・移植関連の検査も推進しており、日本臓器移植ネットワークの指定施設にもなっている。

さらに、試薬メーカーや分析機器メーカーなどとともに、臨床研究にも積極的に取り組んでいることも見逃せない。「現在、研究テーマは約20項目を数えます。最近の研究成果としては、膵臓に含まれる消化酵素の一つであるリパーゼの新しい試薬を、メーカーと共同で開発し

たことがあげられます」と三浦技師長は胸を張る。

生理検査でも群を抜く実績を誇る

一方、生理検査部門も充実した体制と優れた実績を誇っている。とりわけ腹部超音波検査では、12台もの専用診断装置を備え、年間3万件超にのぼる検査を実施している。これは、大学病院の中では断トツの実績である。心臓超音波検査でも、年間検査件数は約1万5,000件とトップクラスである。

また、心電図検査も年間9万件超と群を抜く実績を誇っているほか、内視鏡検査にも力を入れており、その検査件数は年間約1万5,000件を数える。

最後に三浦技師長は、「我々検査部がやってはならないこと、それが検体の取り違えです。当院の採血室では、バーコードによってシステムチックにチェックしているほか、採血時には必ず患者さんにお名前をいっていただいて本人確認をしています。こうしたダブルチェックにより、総合外来センターがオープンした2003年以降、検体の取り違えは一度も起きていません」と、医療安全について言及してくれた。



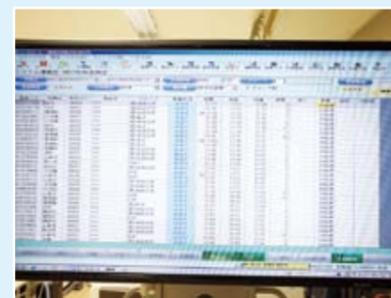
自動搬送ラインを進む採血管。



顕微鏡による精密検査。



免疫・生化学検査ライン。



検査の進捗状況を表示する大型モニター。



中央病棟地下1階にある微生物検査室。



腹部超音波検査は断トツの実績を誇る。



システム化された先進の血液検査ライン。



感染症の検査を行うスタッフ。



検体検査室には尿検査ラインもある。



診療科からの問い合わせ窓口、ラボラトリー・インフォメーション。



群を抜く実績の心電図検査。



内視鏡検査にも力を入れている。



静岡市葵区 徳川家康ゆかりの城下町



館内に入ると優雅なステンドグラスが迎えてくれる。

葵区のシンボルとなっている静岡市役所本館。屋上のドームが印象的である。



駿府城公園内に立つ家康公の銅像。

コンパクトで便利な暮らしやすい街

「静岡駅(JR)と新静岡駅(静岡鉄道)周辺の葵区中心部は、商業施設や飲食店のほか、県庁や市役所、区役所、国の出先機関、さらに学校や公園などの公共施設がコンパクトにまとまっています。しかもそれらが徒歩圏内に位置しているので、駅周辺エリアだけで日常生活が完結する、とても便利な街です。気候も穏やかですし、暮らしやすいですね」

こう語るのは、東京女子医科大学出身で新静岡駅に隣接するおしゃれなビルに「スキンケアクリニック」(12ページの地図④)を構えている平野温子さん。その言葉どおり、葵区の中心部は整然と区画されたコンパクトな街並みを呈している。それもそのはず。街の骨格は、徳川家康が晩年に駿府城を築き、その周辺を整備して城下町として栄えた江戸時代とほとんど変わらないのである。紺屋町、呉服町、両替町、金座町といった町名があるのも、当時の名残だ。

駿府城は焼失したが、城跡は駿府城公園(地図②)として整備され、市民の憩いの場となっている。また、巽櫓(たつみやぐら)、東御門(ひがしごもん)、坤櫓(ひつじさるやぐら)が復元され、駿府城と家康公の歴史を今に伝えている。



復元された巽櫓(たつみやぐら)と東御門(ひがしごもん)。

気品のあるドームと見ごたえのある神社

街のシンボルとなっているのが、国の登録有形文化財に指定されている静岡市役所の本館(地図③)である。1934(昭和9)年に建てられたこの建物は、屋上の気品あるスペイン風ドームが特徴で、ひときわ目を引く。玄関ホールの正面に施されたステンドグラスも優雅さをたたえている。館内には議場があり、市議会はここで開催される。

スキンケアクリニック 静岡での美容レーザー治療のパイオニア



平野温子院長。

院長の平野温子さんは静岡県富士宮市出身。高校は駿府城公園に隣接する静岡雙葉に通い、東京女子医科大学に進学。卒業

後、東京医科歯科大学附属病院、東京女子医科大学附属第二病院(現・東医療センター)を経て2000(平成12)年に静岡へ帰郷し、葵区呉服町に「スキンケアクリニック」を開業。2年半前に現在地に移転した。

平野さんはもともと麻酔医だったが、女子医大附属第二病院時代に形成外科でレーザー治療を行っているのを知る。「レーザーでシミやホクロ、イボ、ニキビなどを治療するのはとても新鮮でした。すぐに興味を持って美容皮膚科の分野もあった形成外科で研修を受けました」。

レーザー治療法をマスターした平野さんは、レーザー治療専門のクリニックがなかった故郷の静岡で開業することを決意。とはいえ、「開業当初はまだ美容と医療がリンクしていない時代だったうえ、保険の効かない自由診療のため認知されるまでかなり時間がかかりました。でも、患者さんの口コミで徐々に知られるようになり、今では親子二代にわたって受診される方も少なくありません」という。

最近ではアンチエイジングや光老化予防へ



優しいデザインとカラーリングの院内。

の関心も高まりつつあり、皮膚美容に対する意識も大きく変わってきている。平野さんは、「ご年配の人たちにはいつまでも若々しく、若い人たちにはより美しくあってほしいと願いつつ、これからも地域のために細く長く微力を尽くしていきたいですね」と抱負を語ってくれた。

- 住所: 静岡市葵区御幸町3-21 ベガサートB1F
- 電話: 054-254-5444
- 診療時間: 10:00~18:00
- 休診日: 水曜日・日曜日
- 地図: ⑧



静岡浅間神社の大拜殿。

葵区の見どころの一つが、市民から「おせんげんさん」と親しまれ、家康公が元服した場所として知られる静岡浅間神社(地図①)である。東京ドームに匹敵する広い境内には、大拜殿をはじめ数々の社殿がたたずんでおり、いずれも絢爛豪華な色彩と彫刻の造形美を誇っている。“東海の日光”と呼ばれる由縁である。国の重要文化財に指定されている社殿が実に26棟にもおよぶことから、見ごたえのあるスポットといえよう。

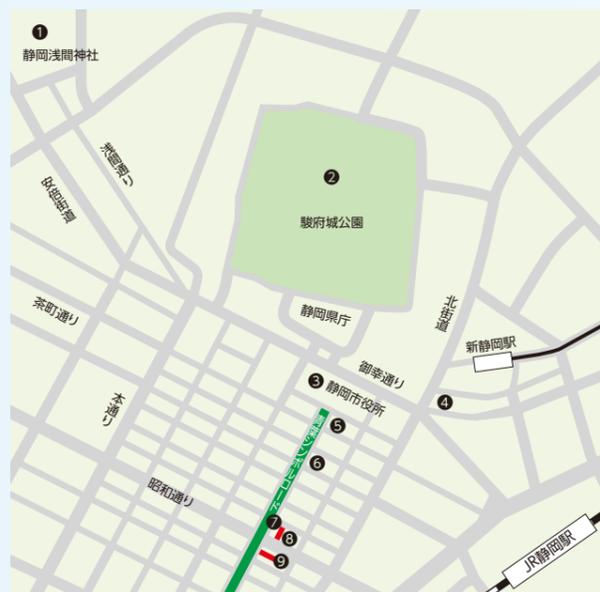
静岡おでんが味わえる昭和レトロなおでん街

静岡といえば、おでん。濃い口醤油を使った黒っぽいスープに、静岡ならではの黒はんぺんや牛すじなどの具材が特徴である。本格的な静岡おでんを味わうなら、やはりおでん街がおすすだ。街中には「青葉横丁」(地図⑧)と「青葉おでん街」(地図⑨)の2つのおでん街がある。どちらも約20店舗のおでん屋が密集しており、昭和レトロな独特の雰囲気醸し出している。

これらの店のほとんどは、市役所前の青葉公園通り(青葉シンボルロード)に並んでいたおでん屋台が前身だ。屋台は約200台にもものぼったが、1957(昭和32)年の都市開発によって徐々に姿を消し、一部が2つのおでん街で営業するようになったのである。風情のあるおでん街で、静岡のB級グルメを堪能してみたいはいかが？



おでん街の「青葉横丁」(左)と「青葉おでん街」。



◆グルメスポット◆

三河屋

おでん街を代表する人気店



創業時からの伝統の味が生きる静岡おでん。

- 住所: 静岡市葵区常盤町1-8-7
- 電話: 054-253-3836
- 営業時間: 17:00~22:00
- 定休日: 日曜日、第2・3月曜日
- 地図: ⑨

おでん街・青葉横丁のおすすめの1店。ビールメーカーのCMの舞台としてモデルになった店で、著名人のファンも多い。1948(昭和23)年の屋台時代から、牛すじと濃い口醤油でつくった出汁を継ぎ足しながら煮込んだおでんスープは、コクがあって旨みが深く、具の牛すじ肉や黒はんぺんも絶品。自慢の黒はんぺんのフライも秀逸な味だ。屋台そのものをカウンターとして使用しているのも趣がある。人気店だけに、席は1時間45分ごとの入れ替え制となっている。「同じ時間帯に同席した人同士が、また同じように集まるケースもありますね」と、ご主人の木口元夫さんが頬をゆるめた。



2代目のご主人・木口元夫さん。



黒はんぺんのフライも人気メニュー。

キルフェボン静岡

有名タルト専門店の1号店

タルトで有名なキルフェボン。東京をはじめ横浜、大阪、福岡など全国に10店舗を展開しているが、第1号店はここ静岡の地にオープンした。「静岡がキルフェボン発祥地ですので、静岡に来られたついでにわざわざ立ち寄ってくださるお客さまも少なくありません」(小野田君の美店長)という。人気商品は「季節のフルー

ツタルト」。イチゴやバナナをはじめ季節のフルーツがぎっしり詰まった逸品である。季節ごとに用意される店舗限定のタルトも好評だ。店内のカフェスペースは、土日になると終日、満席状態が続く。長いときは「60分待ち」になることもあるという。それでも食べたいというほどの価値ある人気スイーツ店である。



オシャレなつくりの外観。



併設されているカフェスペース。



人気No.1の「季節のフルーツタルト」。



「オレンジムースとチョコレートのタルト」(8月までの限定)。

河童土器屋 海鮮丼と天井の丼専門店

- 住所: 静岡市葵区呉服町2-5-3 E-1ビル
- 電話: 054-252-8232
- 営業時間: 11:00~15:00、17:00~21:00
- 定休日: 月曜日
- 地図: ⑩



落ち着いた雰囲気の店内。

店名の「河童土器屋」は、世界遺産に登録されているトルコの奇岩地帯「カッパドキア」に由来している。店主の落合正和さんは、「30年前にテレビでカッパドキアを見て感動し、店名にしました。「土器」の字を当てたのは、器にもこだわっているからです」と説明する。海鮮丼と天井を中心とした丼専門店、「キングオブ静岡ランチ」でグランプリを獲得し、「キングオブ静岡どんぶり」でも上位にランクされた実力店。おすすめは、9種類もの海鮮が豪華に盛りつけられた上海鮮丼。食材は毎日、中央卸売市場で仕込んでいるため鮮度は抜群。見た目にもおいしさが伝わってくる。



9種類の海鮮が盛られた上海鮮丼(税込み1,550円)。



調理実習でつくった料理を手に笑顔の学生たち。

食のセルフケア

グループで意見を出しながら献立を考える。



栄養バランスのとれた食事づくりにチャレンジ

静岡県掛川市で一人暮らしを始めた東京女子医科大学看護学部1年生。バランスのとれた食事を摂取することの大切さをテーマとしたユニークな授業を展開し、彼女たちに食に関する自己管理を促している。

● 食事の管理がキャリア形成の第一歩

病気や障がいのある人たちに寄り添って世話をする役割を担う看護職には、多くの経験を積み重ねながらキャリアアップを図っていくことが求められる。女子医大看護学部では、そうした自己のキャリアを考え続ける態度を身につけることを目的に、1年生から4年生までの学年縦断型カリキュラムとして「キャリア発達論」という授業科目を設けている。

1年生ではまず、キャリア発達の基盤となる“セルフケア能力”を養うことを目標の一つとしている。その一環として組まれているのが、「食のセルフケア」というプログラムである。

看護学部の1年生は全員、静岡県掛川市の大東キャンパスで1年間を過ごす。このため親元を離れ、多くの学生が“一人暮らし”をすることになる。当然、食事は自炊が基本となる。

「いうまでもなく食事は健康のもととなりますが、一人暮らしとなると、どうしても偏った食事になってしまいがちです。バランスのよい食事を摂ることがいかに重



学生たちがトライした簡単バランスメニュー。右：厚揚げのステーキ、中下：野菜レンジ蒸し、中上：ハムロール。左は参考メニューのふかし芋。

要であるかを実践的に理解し、健康に生活するための食事づくりの一助にしてみようのが、『食のセルフケア』の大きな狙いです」と、キャリア発達論を担当している山口紀子助教がプログラムの趣旨について説明する。将来、看護職としてのキャリアを身につけていくためにも、日々の食事の自己管理こそが第一歩になるということだ。

● 簡単バランスクッキングにトライ!

「食のセルフケア」は、掛川市の管理栄養士を講師として招き、まず座学形式の「講義」が行われる。今年4月28日に実施された。次に学生をA・B・Cの3つの班に分け、5月11日にA班とB班、12日にC班がそれぞれ栄養実習室において「調理実習」に臨んだ。各班は5~6人ずつのグループに分けられ、グループご



栄養実習室へ向かう前に手をチェック。



講師を囲んで見本づくりを見つめる。



それぞれの受け持ちを決めて調理開始。



手慣れた包丁さばきで野菜をカット。



器用な手つきでハムロールをつくる。



盛りつけにこだわって最後の仕上げ。

とに調理実習が進められる。

そしてC班の調理実習が終わったあと、A班・B班も含めた学生全員がキャンパス内の図書館に集まり、グループごとに机を囲んで“献立づくり”に取り組んだ。「食のセルフケア」は、こうした“講義”“調理実習”“献立づくり”の3つのプログラムで構成されている。

では、5月12日に行われたC班の調理実習をのぞいてみよう。午前9時、衛生キャップにエプロン姿の学生たちが食堂に集合。山口助教とともにキャリア発達論を担当している多久和善子助教が、「先日の管理栄養士さんによる講義の内容を踏まえ、これから実際に料理づくりにチャレンジします。簡単にできるバランスのとれたメニューですので、ぜひ覚えて食事づくりに役立ててください」とあいさつして授業が始まった。

栄養実習室へ向かう前、山口助教が

学生1人ひとりの手をチェック。マニキュアやネイルアートは料理をするうえでふさわしくないからだ。幸い全員がチェックをクリアすることができた。

●野菜が豊富なヘルシーメニュー

いよいよ調理実習開始。“簡単バランスクッキング”というキャッチフレーズのもと、「厚揚げのステーキ」「野菜レンジ蒸し」「ハムロール」の3品の料理づくりに挑戦する。まず、講師を務める2人の管理栄養士が、レシピを紹介しながら順番に3品の見本をつくっていく。その様子を学生たちが真剣な表情で見つめる。3品はほんの15分であっという間に出来上がった。なるほど、簡単である。

9時20分過ぎ。今度は学生たちがつくる番だ。5つのグループに分かれた学生たちは、それぞれ備え付けのアイランドキッチンを取り囲み、誰が何を受け持つかを相談しながら料理づくりを進めてい

く。包丁さばきがぎこちない学生も散見されたが、みな実を楽しそうだ。「講義より断然おもしろい!」といった声も上がった。

調理時間は9時50分まで予定されていたが、段取りのよいグループやチームワークのよいグループは、講師と同じように15分くらいで調理を完了。他のグループも9時45分までには料理をつくり終えた。それらを試食した学生たちからは、「できは完璧。とてもおいしいです」、「簡単につくれるのが大きな魅力。得意メニューが増えそうです」、「野菜が豊富でヘルシーなところがいいですね」などの感想が聞かれた。

ちなみに、各料理の1人分のカロリーと塩分は次のとおりである。

- 厚揚げのステーキ：152kcal / 0.8g
- 野菜レンジ蒸し：89kcal / 0.8g
- ハムロール：63kcal / 0.4g



みんな笑顔で「完成で〜す」。



「おいしいね」と楽しそうに試食。



笑顔を交えながらお互いの献立をチェック。



真剣な表情で献立づくりに取り組む。

ヘルシーで栄養バランスのとれた料理であることがよく理解できよう。

●献立づくりで食のバランスを考える

C班の調理実習は10時10分に終了。その後、前日に調理実習を行ったA班とB班も含め、学生たちが図書館に集合。10時25分から“献立づくり”が始まった。あらかじめ配付されていた献立記入表に、前日の夕飯に食べたメニューを書き込み、それを持ち寄ってグループで検討しながらよりバランスのとれた献立に仕上げようというのだ。

山口助教は、「グループワークでは、主

菜と副菜をどうすればバランスよく摂取できるかを話し合うことに主眼を置いています」という。

あるグループの声を拾ってみよう。「カレーを食べたけど、何が主菜かな?」、「やっぱ肉でしょ」、「ジャガイモは多いと主菜になっちゃう?」、「副菜だと思ふな」、「私が食べたのはカルボナーラ。主菜は卵だよ」、「ベーコンかもよ」、「う〜ん、どっちだろう?」、「果物は食べなかったんだ」、「バランスがよくないよね」。

笑顔を見せながら話し合っている姿がほほえましい。ある学生は、「こんなに真

剣に献立づくりを考えたのは初めて。けっこう難しいですね」という。別の学生は、「あと1品加えればバランスのとれた食事になるという“気づき”がありました」、「食費を管理するのを優先して栄養面にまで気が回りませんでした。食事のバランスにも気を遣わなければならないことを学びました」と、“献立づくり”の意義を語る。さらに、「食事を用意してくれた母親の大変さがよく分かりました」といった声も。

学生たちにとって“献立づくり”は、非常に有意義な授業だったようだ。



1年生全員が図書館に集まって行われる“献立づくり”の授業。

光老化



「光老化をご存知ですか?」というテーマで開催された健康セミナーの様相。新宿・四谷保健センターの会場には多くの人が詰めかけ、光老化に対する関心の高さを物語っていた。

太陽光線による肌の老化をシャットアウト!

紫外線や近赤外線の原因とするシミやしわ、タルミなどの皮膚障害。それが“光老化”である。その延長には皮膚がんもありうるだけに、適正な予防対策が求められる。

□関心が高まりつつある光老化

去る4月27日、東京・新宿の四谷保健センターで新宿区主催の「女性のための健康セミナー」が開催された。この日のテーマは「光老化をご存知ですか?」というもの。当初の募集人員は50人であったが、申込者はこれを大幅に上回った。このため、会場に所狭しと並べられた椅子

はすべて埋め尽くされた。

講師を務めたのは東京女子医科大学皮膚科の川島眞教授。NPO法人皮膚の健康研究機構「光老化」啓発プロジェクト委員会のメンバーでもある川島教授は、早くから光老化予防と対策の必要性を訴えてきた皮膚科の名医である。

皮膚の健康研究機構が2015年10月

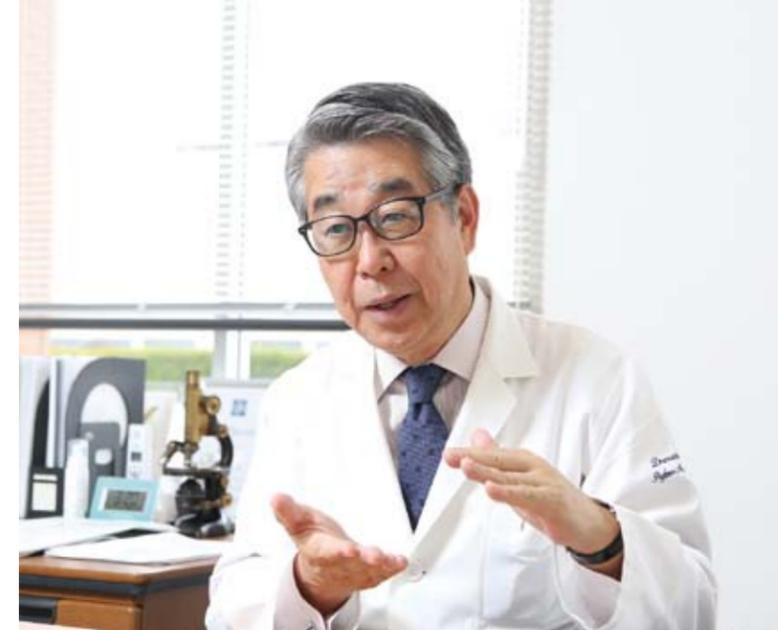
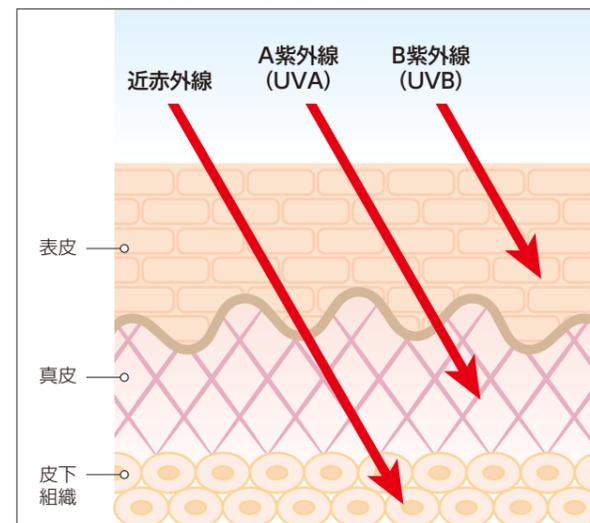
に実施した光老化の認知度調査(12歳以上70歳未満の男女321人対象)によると、光老化について「意味を含めて知っている」と答えた人の割合はわずかに4.2%にすぎず、「聞いたことはあるが詳しくは知らない」という人の割合も9.6%と1割にも満たず、86.2%の人が「知らない」と答えている。つまり、ほとんどの人が光老化という言葉を知りていなかったわけだ。

その後、川島教授らによる市民公開講座やメディア向けセミナー、全国紙への記事掲載などの光老化啓発活動が奏功し、光老化に対する関心も徐々に高まりつつある。新宿区の「女性のための健康セミナー」に大勢の人が詰めかけたのが、その何よりの証だといえよう。

□シミ・シワ・タルミのメカニズム

では、光老化とはいったいどういうものなのだろうか。川島教授は次のように説明する。

■太陽光線の皮膚への到達範囲



光老化予防の大切さを訴える川島眞教授。

□皮膚がんの発生につながるリスク

前記したように、太陽光線による皮膚障害は光老化にとどまらず、その延長線上には皮膚がんが存在するを見逃してはならない。日本人はもとも、光に対する防御力を備えたメラニン色素の多い肌をしているため、それが乏しい白人に比べて皮膚がんになるケースは比較的少ない。とはいえ、日本でも皮膚がんの患者数は増加傾向にある。

その背景について川島教授は、「最近オゾン層の破壊に伴って紫外線の量が増加しており、北海道でもそうした現象が見られるとのこと。加えて、高齢化社会になるにつれて長期間、紫外線を浴びた人が増えているのも、皮膚がんの増加につながっている要因だといわれています。私も外来で、太陽光線が原因と思われる皮膚がんをよく目にするようになりました」と指摘する。

皮膚がんの死亡率は低いとはいえ、命を落とすケースももちろんある。それだけに、光老化予防と対策が重要であることはいうまでもない。

□サンスクリーンの適正使用を訴求

光老化の最も一般的で合理的な予防法が、十分な紫外線防御効果を持つサンスクリーンの使用である。皮膚の健康研究機構の調査によると、サンスクリーンの使用を「日常的に使用している」人の割合は、男性が3.2%と極めて低い

に対し、女性は24.4%と4人に1人という結果だった。また、「日差しが強いときに使用する」という割合は男性が14.1%、女性が39.1%で、日焼けを嫌う傾向にある女性でも、その対策を講じている人の割合は半分以下というのが実情である。

しかも、サンスクリーン製剤が使われていても、それが適正使用ではないケースが多いことも浮き彫りとなっている。「サンスクリーン製剤には紫外線を防ぐ効果を表す数値とその適正な使用方法が示されていますが、実際には適正とされる量の半分くらいしか塗られていません。これでは効果が期待できず、たっぷり塗ることが大切です」と、川島教授は警鐘を鳴らす。

さらに、「太陽光線による皮膚障害に対して、日本人は警戒心が乏しいといわざるをえません。“シミぐらい問題ないだろう”と。でも、その先には皮膚がんもあるということが、まだまだ知られていません。そういうことを含めて、サンスクリーンの適正使用を訴えています」という。

川島教授はこれまで、女子医大で多くの美容皮膚科医を育ててきた。「アメリカでは政治家やエグゼクティブといわれる男性たちも、肌のケアに気を遣っています。日本でも彼女たちの手によって、女性だけでなく男性にも光老化予防を広めてほしいですね」と締めくくってくれた。

■光老化の症状



軽症:シミ、イボ、小じわが生じている。



重症:シミ、イボ、シワ、タルミが生じている。

スムーズな復職をサポートする 女子医大ならではの 研修プログラム

出産・子育てなどによって医療現場を離れたものの、再び現場に復帰したいと願う女性医師は少なくない。東京女子医科大学では、そうした女性医師のために研修プログラムを用意し、復職の実現を後押ししている。



女性医師(左)に付き従って総合診療科外来の診察に立ち会う山口あけみさん。内科系外来での復職をめざしている。

●10年のブランクを経て復職を決意

去る6月28日の水曜日。東京女子医科大学病院総合外来センター 1階にある総合診療科外来の診察室には、若い女性医師に付き従って患者さんの診察に立ち会うもう1人の女性医師がいた。医療現場への復職をめざして研修を受けている山口あけみさんがその人だ。

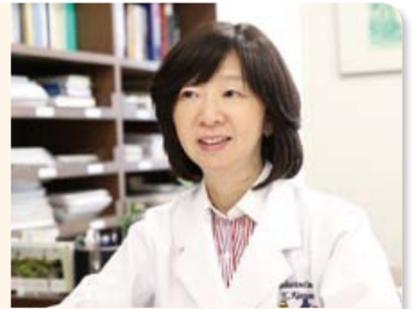
山口さんは女子医大出身である。卒業後、血液内科での研修を経て女子医大附属膠原病リウマチ痛風センターに勤務。3年目に結婚し、夫がニューヨークへ赴任することになったため退職して同行。4人の子どもに恵まれ、育児に追われながら10年余りニューヨークで暮らし、今年1月に帰国した。この間、医療の現場からは遠ざかっていた。

とはいえ、山口さんは帰国する2年前から復職へ向けてひそかに準備を進めていた。女子医大の女性医療人キャリア形成センターが提供している「教育・学習支援プログラム」(e-ラーニング)を、インターネットを通じて受講していたのである。このプログラムは、臨床基本や臨床実践など約100コンテンツで構成され、医療従事者であれば地域を問わず誰でも利用することができる。

「帰国したら復職しよう」と考えていた山口さんだが、e-ラーニングを学ぶにつれ、10年間のブランクの大きさを痛感。そこで、帰国して一段落したら研修を受けようと思いつき、女性医療人キャリア形成センターが運営している「女性医師再研修部門」を訪れた。そして、6月半ば

女性医師の現場復帰は 社会が望んでいます

女性医師再研修部門 部門長
東京女子医科大学放射線腫瘍学講座教授
唐澤 久美子



即した研修プログラムを提供するとともに、最も復職ニーズの高い一般内科外来のスキル獲得をめざした研修プログラムを用意しています。

女性医師の現場復帰は、患者さんやそのご家族の役に立つだけでなく、医師の労働環境改善にもつながります。また、出産や育児を経験した女性医師は、患者さんと接するうえでそれをメリットとして生かすこともできるでしょう。私たちの取り組みを、女性医師復職支援のモデルとして広く発信していくことも重要なことだと考えています。

から3か月間、毎週水曜日に総合診療科で研修することになったのである。

内科系外来での復職を希望している山口さんは、「当初、どの診療科で研修を受けるか決めかねていました。総合診療科にしたのは、横田先生(下段の囲み記事参照)から『臨床現場を総括的にとらえることができ、活気もあって働き取り戻すにはふさわしい診療科』というアドバイスをいただいたからです。患者さんを診るためにはたくさんの引き出しが求められますが、患者さんから学ぶこともたくさんあって、総合診療科にしてよかったと思っています」という。

山口さんの末のお子さんはまだ3歳ですが、「母が子育てを手伝ってくれていま

す」とのこと。そして、「私が復職に向けてアクションを起こしたことを、母がとても喜んでいて、山口さんは笑顔をのぞかせた。

●まずは外来で現場感覚を取り戻す

女性医療人キャリア形成センターの女性医師再研修部門では、「再研修—復職プロジェクト」と「一般内科プロジェクト」の2つのプロジェクトを展開している。「再研修—復職プロジェクト」は、日本赤十字社や済生会など外部組織とも協力しながら復職希望者からの相談や研修に対応。「一般内科プロジェクト」では、復職希望が多い一般内科の診療スキルを身につけるための研修を提供している。

女性医師再研修部門 一般内科プロジェクトチーフ
東京女子医科大学保健管理センター 講師

横田 仁子



一般内科医としてのスキル獲得を支援

研修希望の女性医師の多くは、自宅から近い地域に立地する病院や診療所の一般内科外来での復職をめざそうとしています。では、一般内科外来にはどのような主訴(患者さんが訴える主な症状)の人が多く訪れるのでしょうか。その実態を調査するために、私たちは「一般内科プロジェクト」を立ち上げ、中小規模病院および診療所合わせて6施設を対象に、4,400症例超のサンプルを得ました。

その結果、主訴は多い順に「咳」「発熱」「咽頭症状」「頭痛」であることが判明。これら4主訴で全体の過半数を占め、しかも夏

季・冬季とも同じような傾向であることが分かりました。したがって、「咳」「発熱」「咽頭症状」「頭痛」に対応できれば外来診療の半分はこなせることになり、これら4主訴が一般内科医としてマスターすべき疾患群ととらえることができます。

ただ、初診外来には地雷が潜んでいます。風邪の症状に隠されている重篤な病気を発見してはなりません。そうした鑑別診断能力をどのように養うかということも含め、より充実した一般内科外来の研修プログラムを構築していきたいと思っています。



東医療センター内科の小川哲也准教授(女性医師再研修部門副部門長)と研修を受けた小出純子さん。育休中の小出さんは再就職する意向である。

研修はどちらも週1回・3か月間を基本としているが、その内容について女性医師再研修部門の副部門長を務める東京女子医科大学東医療センター内科の小川哲也准教授(血液浄化部部長)は次のように説明する。

「まずは現場の感覚を取り戻すために外来での診療を見学していただきます。現場に慣れてきたら予診を行い、それを指導医にチェックしてもらったうえで診察に立ち会います。そして、次のステップとして実際に診察をしていただきます。もちろん、分からないことや困ったことがあれば指導医がフォローします。さらに、救急外来や病棟の回診に参加していただくことも可能です」。

● 育休明けには再び現場復帰したい

小川准教授は、こうした研修を通じてこれまで何人もの女性医師を指導してきた。その中の1人が小出純子さんである。

川崎医科大学(岡山県倉敷市)出身の小出さんは、皮膚科医として都内の大学病院に勤務していたが、5年前、出産

と同時に退職。それを機に、「これからは高齢化社会になるので内科をまんべんなく学んでみたい」と思うようになった。そうした受入先はないかとインターネットで調べていたところ、女性医師再研修部門の「一般内科プロジェクト」が目にとまり、コンタクトをとったという。

子育てで1年半、医療現場を離れていた小出さんは、2014年3月から小川准教授のもとで研修を受けた。「研修プログラムはとても充実していて、貴重な3か月間を過ごすことができました」と振り返る小出さん。研修終了後はそのまま内科医として東医療センターに勤務することになった。「最初の頃は戸惑うことばかりでしたが、先生方が親切に教えてくださり、何とか務めることができました」という。

その後、小出さんは2人目のお子さんを出産し、2016年9月から育休に入っている。「育休が終わったら、また現場に復帰したいと思っています」と意欲を見せている。

● 専門医としての再デビューをめざす

「再研修—復職プロジェクト」に登録申

請し、去る5月中旬から週1回、膠原病リウマチ痛風センターで研修を受けているのが山崎明子さんである。

リウマチ専門医の資格を持つ山崎さんは、熊本大学医学部の出身で、卒業後4年間、北海道の病院に勤務したあと、久留米大学病院呼吸器・神経・膠原病内科で6年間、リウマチ患者さんを診てきた。現在は一般内科医として都内2か所のクリニックで診療活動を行っている。したがって、医療現場を離れているわけではない。

山崎さんが膠原病リウマチ痛風センターでの研修を希望したのは、専門医資格更新に必要な症例を確保し、再びリウマチ患者さんの診療に携わりたいと思っているからにほかならない。

「今はリウマチ患者さんを診ることはなく、リウマチ医としては7年間のブランクがあります。この間にリウマチ診療は大きく変わり、新しい薬も出てきています。そうした変化を知り、最新の治療法を吸収するために研修を希望しました」と山崎さんはいう。「女子医大の膠原病リウマチ痛風センターは、日本最大で世界的にも知られるリウマチ性疾患専門施設ですから、やはり研修のしがいがあります」とも。

研修終了後もしばらくは一般内科医を続けるとのことだが、「近い将来、リウマチ医として再デビューを果たしたいですね」と山崎さんは意気込みを語った。



膠原病リウマチ痛風センターで最新の治療法を学ぶ山崎明子さん。

— その8 関東大震災 —

増築したばかりの東京至誠病院を焼失



大正11(1922)年に夫・荒太を亡くした彌生は、「吉岡家を守り、子どもを立派に育てていくために夫の分まで働かなければ」と決意を新たにした。幸い、飯田町にある彌生の個人病院・東京至誠病院(現在の地下鉄「九段下」駅近く)には次から次へと患者が押しかけるという繁盛ぶり。隣接の家が空くと買い取って病室を増やすものの、すぐさま手狭になってしまい、反対側に隣接する家が売りに出るとそこも手に入れて病室に改築するといった具合で、病院は徐々に大きくなっていった。

さらに、病院裏手の弁護士の家と、地続きになった二軒の長屋が空いたためこれも買い取り、100坪ほどの土地に病室と食堂をつくることにした。病室には扇風機や暖房装置が備えられ、食堂は50人くらい収容できる規模で、「わざわざ料理屋へ行かなくても会合が開けるように」という彌生の思いを反映したものだった。これらの建物が出来上がり、請負業者に約4万円の建築費を支払って引き取ったのが大正12(1923)年8月31日だった。



関東大震災で焼けた東京至誠病院。

その翌日に悲劇が襲った。9月1日午前11時58分、関東大震災が発生し、それに伴う火災によって病院を焼失。増築したばかりの病室や食堂も灰燼に帰ってしまったのである。

建物は地震の揺れに耐えたため、彌生は当初、患者や職員に「危ないから外に出てはいけない」と呼びかけた。案の定、外へ飛び出したため崩れ落ちてくる屋根瓦などで怪我をした人たちが治療を受けにやってきた。その手当てをしている

うちに近くで火の手が上がり、病院が危なくなったため入院患者や看護婦など100人近い一団を近くの公園に避難させ、さらに倒壊や火災を免れた河田町の学校や学校附属病院へ全員を移送させた。

葉山へ行っていた彌生の母や息子の博人、義弟・正明の子どもらの消息が不明だったが、4日夜になって無事が確認された。ホッとした彌生は、河田町にやってくるおびたしい数の怪我人や病人を全力で治療した。そして飯田町の病院を復興すべく、震災直後に組閣された内閣で内務大臣兼帝都

復興院総裁となった後藤新平を訪ね、「材木の世話をしていただきたい」とお願いした。しかし「係りの者と相談せよ」といわれ、それではちが明かないと判断して自力で材木を買い集め、約300坪のバラックづくりに着手した。

そうした中、彌生は飯田町からほど近い下宮比町の焼け残った病院が売りに出ている

ことを知る。売値は25万円。彌生はそれを20万円まで下げさせ、思い切って購入した。修繕を加えて11月23日に東京至誠病院としてオープンするや、たちまち病室が一杯になり、院長室にまでベッドを並べるほどだった。バラックの建物は、東京女子医学専門学校の卒業生組織である至誠会に寄付され、至誠会病院として大正13(1924)年1月1日に開業。彌生は、日曜日の午前中だけはこの至誠会病院に向かい診療を行った。

編集後記

■女子医大病院中央検査部の採血コーナーと検体検査室は、圧倒的なキャパシティとスピーディな検査に定評があります。それを支えている臨床検査技師は「黒子」的な存在ですが、彼らがいなければ正確な診療はできないことを再認識しました。

■新シリーズ「女子医出身者が活躍する街」の第1回目は静岡市葵区。スキンケアクリニックの平野院長は、「コンパクトで暮らしやすい街」と魅力を語ってくれました。風情のあるおでん街や静岡発祥のタルト専門店などグルメスポットも豊富。また訪れてみ

たい街です。
■掛川・大東キャンパスの看護学部1年生向けに行われたユニークな授業「食のセルフケア」。栄養バランスのよい簡単メニューの調理にトライした彼女たちの生き生きとした表情は、とてもほほえましいものでした。

■日本の男性は太陽光線による皮膚のダメージにほとんど無関心ですが、「アメリカでは政治家やエグゼクティブといわれる男性も肌のケアに気を遣っています」と皮膚科の川島教授。自分も光老化予防を考えなければと思うようになりました。